



五條新町 重伝建に選定される 江戸時代からの建造物の魅力を全国に発信

平成22年12月24日、五條市の五條新町地区が、国の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）に選定された。正式名称は「五條市五條新町伝統的建造物群保存地区」。県内では橿原市今井町、宇陀市松山地区に続いて3件目の重伝建地区となった。

1608年（慶長13年）、松倉豊後守重政が大和五條の二見城に入城。1610年に、紀州街道に沿って隣接していた五條村領と二見村領の双方から、90軒分の土地を取り立てて、商家を集め新たに「新町」を作り、諸役（税）を免除し、城下町の繁栄を図った。

江戸時代を通じて五條と新町は伊勢街道沿いの宿駅として賑わい、南大和地域の中心的な商家町として繁栄し、重厚な町家が建ち並んだ。

保存地区は、五條市五條1丁目、本町2丁目、新町1・2丁目、二見1丁目などにまたがる約7ha。地区内には、1607（慶長12）年の棟札が残る栗山家住宅（重要文化財・非公開）があり、建築年代のわかっているものでは日本最古の民家といわれる。

奈良国立文化財研究所（当時）が昭和50年に調査した報告書によると、町並みの特徴は、木造の瓦葺きで、軒家や二階壁面を厚く漆喰で塗りこめ、虫籠窓（中二階に通風と明かり取りのために設けられた窓）を開け、1階は木格子ややシトミ戸（町家の前面にはめ込む横戸）を用い、全体に重厚な建築であるとされている。

この調査を踏まえ、地元の市民が景観を守るため、町家の補修や川、道の補修をするよう五條市に訴え、平成9年、「五條市新町地区街なみ環境整備協議会」が発足した。

平成16年に、明治から大正にかけて建築され、民家として使用されていた建物を改築し「まちなみ伝承館」がオープン。続いて、平成17年には、初代保安庁長官を務めた木村篤太郎の生家を復元修復した「まちや館」がオープン。江戸時代の伝統的な町家建築の様式による家屋のほか、井戸やかまどなども修復され、当時の暮らしが偲ばれる。

平成20年には同協議会が発展的に解消し「五條新町地区町なみ保存会」が発足。五條市が、昭和初期以前の建造物195棟の所有者を訪問、重伝建の説明をした結果、143棟について保存が承認さ

れ、昨年8月に文化庁へ重伝建選定の申し出をした。

町内では、昨年は、アレックス・カー氏のプロデュースで築後約250年の町家を改修したレストラン「五條 源兵衛」が開店。今年は、短期賃貸契約による一棟貸し形式の宿泊施設がオープンの予定。また、フレンチレストランの出店も予定されている。

「五條新町地区町なみ保存会」副会長の山本陽一氏は「元々、この地区は商家町として繁栄したことから、商売人の出店を期待している。町おこしの活動の20年目に選定となり感無量。この町をさらに磨いて、全国にとどろかせるまちづくりをしていきたい」と語っていた。（上田 祥博）



日本最古の民家といわれる「栗山邸」



江戸時代の風情を残す新町通り



「まちや館」
江戸末期の建物
屋根は本瓦葺きで切妻造の平入、外壁は塗妻造の白壁板貼り